佐久の先人たち㊾

大正に設立されたプロ野球団の主力選手

清水鷹次郎（しみず たかじろう）

（1899～1931年）

日本のプロ野球第一号と伝えられている読売巨人軍よりも、13年も早く「日本運動協会」が誕生した。その野球チームの主力選手。昭和のはじめ、佐久への郷土訪問野球で好プレーを披露。満場の野球ファンをうならせた。

●巨人軍より一三年も早く

清水鷹次郎は、北佐久郡高瀬村（現佐久市横和）の出身。一九一九（大正8）年、野沢中学校（現野沢北高校）を卒業して北佐久郡三井小学校（現東小）教員となった。勤めて一年ほどたったある日、「野球見習選手募集」の新聞広告に目を奪われた。広告主は日本運動協会というが、聞いたことがない団体だ。

好きな野球で「メシが食える」と、清水はすぐにこれに応募した。選考の末、選ばれたのは清水ら一四人で、東京芝浦に専用球場が用意され、一九二一（大正10）年に球団は正式にスタートした。読売巨人軍が誕生したのは昭和9年、それより一三年も早い。

大正時代に誕生した日本最初のプロ野球「日本運動協会」の精鋭たち。後列右から3人目が清水

一年余りのキャンプのあと、協会球団は一九二二年六月、活動を開始した。国内で対戦相手がいないので、朝鮮・満州への遠征を行い、京城（現ソウル）、奉天（現瀋陽市）、旅順（現大連市旅順口）など七都市で一七戦して一二勝、まずまずの成績をおさめた。

対戦相手に希望した学生野球は、協会球団を「商売人野球」とさげすみ、対戦に応じなかった。ただ早稲田大学だけは、野球部長の安部磯雄教授（後に社会大衆党委員長）が「同じ野球人だ」といって対戦に応じた。

こうしてプロ対学生野球の一戦は、一九二二年の九月九日、芝浦球場で行なわれた。入場料は一等一円・二等五〇銭という史上初の有料試合で、試合は経験深い早稲田に一日の長があった。敗れたとはいえ、常勝早稲田に肉薄した協会球団に大きな拍手が鳴り止まなかった。

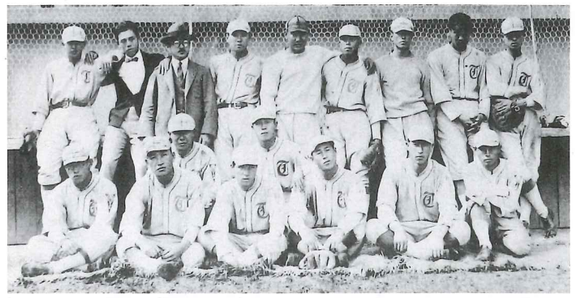
●男は野球、女は歌劇

この試合に刺激されたのか、当時奇術で大活躍の天勝一座が野球団を組織した。この球団ははじめプロかアマか、はっきりしなかったが、たまたま実業団で最強を誇る大毎野球団を破ったことから、プロ球団に仲間入りした。その第一戦が、一九二三（大正12）年、朝鮮の京城で開かれた。協会は投手の不調から、6―5と痛恨の負け、三日後に再度試合を挑んで3―1で雪辱した。そこで改めて内地での決勝戦となり、八月三〇日芝浦で行われた。

日本初のプロ対プロの試合というだけに、この日の芝浦球場は満員の盛況だった。試合は協会が終始リードし、5―1で戦いを決した。破れた天勝は、このまま引き下がれないと、再試合を申し入れた。だが天勝にとってはこの試合が最後のものとなった。二日後の九月一日の関東大震災で、東京は一瞬のうちに焦土と化し、芝浦球場は軍によって強制収容され、復興資材の置き場となった。もう野球どころではなくなった。

この事態に対し、かねてから野球の将来に関心を寄せていた大阪の阪急電鉄社長小林一三は、「男は野球、女は歌劇」と、宝塚に球場を設け、協会球団をそっくり引き取った。球団は「宝塚運動協会」として再生し、清水は新球団の主将に選ばれた。

宝塚球団は大震災一年後の秋から本格的活動をはじめた。まず東京帝国大学を除く東京六大学との対戦だった。この頃になると、対戦を拒んでいた東京の大学も応戦するようになった。結果は二勝二敗一引き分け、五分五分の成績だった。



関東大震災でチームは解散、かわって「宝塚運動協会」に移籍。前列左から2人目が清水

一九二五（大正14）年六月、球団は四回目の大陸遠征を行った。このときの結果は二五勝一敗、まさに連戦連勝だった。この戦果を土産（みやげ）に九月には、アメリカ遠征から帰ったばかりの実業団最強のチームである大毎野球団と対戦し、10―3で大勝した。これを機会に大毎野球団とは、翌年から三回制の定期戦を行うようになった。

●佐久クラブと18―0

宝塚球団は佐久にも遠征している。一九二八（昭和3）年六月、野沢小学校グラウンドで、黒沢富次郎（後の衆議院議員）ら佐久の野球好きの集りである佐久クラブと対戦し、18―0という大差で大勝している。清水にとっては〝郷土訪問野球〟となった。当時の記録によると、観衆五千人、佐久では無敵の同クラブも、宝塚には歯がたたず、安打は宝塚17本に対し佐久6本、三振は14個も取られ、プロの力をまざまざとみせつけられた。

この年、世界はかってない不況に見舞われた。野球界にも大きな嵐で、期待していた後続のプロ球団も不況で絶望的となった。そのうえ、好敵手だった大毎野球団は、オーナーの毎日新聞社が、全国の実業団野球振興のため、都市対抗野球を開催することになり、これに吸収された。

この人気カードの解消と不況で、宝塚球団を運営する阪急主脳部も、球団解散を決めた。日本運動協会として設立して七年、この間の成績は三二二勝一三二敗一四引き分け、勝率は七割九厘だった。一四人のメンバーで設立した球団に、最後まで立ち会ったのは清水らわずか四人だけだった。

球団解散後の清水は、福井商業学校（現福井商業高校）の野球部監督に迎えられた。当時福井県の中等野球は敦賀（つるが）商業学校（現敦賀高校）の全盛時代だった。清水は「打倒敦商」をめざし立ち上ったが、就任三年目三二歳でこの世を去った。その死の床には野球人にふさわしくユニフォームがかけられていたという。

対戦相手を求めて大陸へ遠征する宝塚運動協会チーム、下関港にて。後列右から3人目が清水

（中村勝実）

○参考文献

中村勝実『近代佐久を開いた人たち』櫟　一九九四

佐藤光彦『もうひとつのプロ野球』朝日新聞社　一九八六